

萬葉集の雪

村田通男

四季の変遷に伴う自然現象が、万葉集にはどのように現われているか、ということ調べて見たいと思ひ立つたのは実に久しい以前のことであるが、今回漸くその第一部とも云うべき「雪と霰」についてまとめることが出来たので、その骨子のみを発表することにしよう。

一

万葉集中に雪がどのように記述されているかを総索引に依つて調べると左のごとくである。

(一) 題詞又は左註

(2) (4) 同一歌に詠まれた回数

◎ 其他の項目との重出

沫雪 (短15、左1)

一四〇、一四六、一五九、一六四、一六八、一七五、一八三、一八四、二二四
三三三、三三三、三三三、三三三、三六〇、◎ (二六〇) 左註

大雪 (長1、短2、題1)

一〇三、◎ 一三九、(四六五)、四六五

白雪 (旋1、短6、題1、左1)

一六四、一六四、一六八、三三九、(二五三)、三六六、(三六六) 左註、四三六、四四五

雪月 (題1)

(四三四)

雪梅 (題2)

(一四二)、(一六九)

波太列 (短1)

一七九

波太禮 (短1)

四二四

薄太禮 (短1)

三三七

波都由伎 (短1)

四七五

三雪 (長3、短8)

四〇、◎ 一三九、三三三、一三九、一六五、三三三、三三八、三五五、三九四、三三三

四〇六

美雪 (長1)

- 3 同一の歌で二回雪を詠み込んだものが六首(三五、三六、三九、三九、六九、三九)、四回詠んだものが一首(三三)存する。
- 4 従つて歌に詠み込まれた雪の回数は、すべて一六四回となる。

5 他に題詞二例、左註四例、計二五例が存する。

註 右の表は総索引をもとにして作製したものであるが、総索引に出ていないものは適当に附加した。例えば「由吉」における三三の歌などがそれである。

また集中に数十首をまとめて「寄雪」「詠雪」として出ている場合の題詞は、その一群の最初の歌の題詞として扱った。例えば(六三、三三六、三三三)等における「雪」の題詞がそれである。

二

さて一六四回にわたつて詠み込まれた雪は、それぞれ一首の歌においてどのような役割を果しているであろうか、すなわち以下形体的に、内容的にこれらの雪を調べて見よう。各項にわたつて詳しく論じたいのであるが、簡略を期するため各一例を附するだけとし、論説は出来るだけ省略した。

1 序として用いられたもの

a 「著し」にかゝる序(三例)

吉隠の野木に零りおほふ白雪の著くしも恋ひむ我かも(三三)

他二例(三三三、三三三)

b 「消、日」にかゝる序(二〇例)

零る雪の空に消ぬべく恋ふれどもあふよしなしに月ぞ経にける(三三三)

他七例(二五五、二六六、三三七、三三〇、三三一、三三三、三三五)

右に準ずるもの註一例(二七六)

「消」の音から「日長く」にかけた例一首

海人小船泊瀬の山に落る雪の日長く恋ひし君が音ぞする(三三三)

註 (二七六)は歌体から見れば序ではないが、その内容の意味するところから考察すると多分に序的な意味をもっているのでこの項におさめた。

c 「行」にかゝる序(二例)

わがやどの君松の木に零る雪の行きには行かじ待ちにし待たむ(三三三)

他一例(二六)

d 「厭ひ」にかゝる序(一例)

わざみの嶺行き過ぎて零る雪の厭ひもなしと申せその子に(三三三)

「厭ひ」は「うけく」と訓む説もあるがこゝでは「いとひ」と訓んでおく。

e 「しくしく」にかゝる序(一例)

真木の上に零りおける雪のしくしくに思ほゆるかもさ夜訪へわが背(二五五) 池田廣津娘子

f 「ねもころ」にかゝる序(二例)

高山の巖に生ふる菅の根のねもころごろにふりおく白雪

(四四五) 橋諸兄

g 「降る↓古る」にかゝる序(一例)

奥山の真木の葉しのぎ零る雪のふりは益すとも地に落ちめ
やも(四〇〇) 橋奈良麻呂

この一首の上三句を明らかに「年ふる」の序として扱つたものは全積、「雪ふる」に「年ふる」を通わした寓意とするものに大成本、私注、全講等があり、後者の方が有力であるが、一先ずこの項に入れておく。

2 序的用法

元来序詞は二句以上からなる一連の句が、ある語句を引き出すために特に用いられる場合をいうのであり、従つて序詞として用いられた部分は、例えば「吾妹子が赤裳ひづちて植ゑし田を刈りて蔵めむ倉無の浜」(二七〇)における上四句のごとく、一首の解釈には全く関係しないのが本体であるが、こゝに序的用法というのは序としてのはたらきをなし、猶且解釈をも必要とするものを云うのである。このような意味における序的用法の例は長歌に三首、短歌に三首を見出すことが出来る。

a 時じき心(長三)

み吉野の 耳我の嶺に 時なくぞ 雪は降りける 間なく
ぞ 雨は零りける その雪の 時なきがごと その雨の

間なきかごと 隈もおちず 思ひつゝぞ来る その山道を

(三五) 天武天皇

他二例(二六、三三九)

右の例における「時なくぞ……間なきがごと」の八句はすなわち序的用法であり、他の二例もまたこれと同巧異曲である。

b 千重の雪

後の項で述べることく、瑞兆と見られる雪は、当然千重にも五百重にも降りしきることを願う心となつて現われるのであるが、こゝに本来の意味を外れて、千重に降りしき雪を己が心の千重に積ることにかけて歌つたいわゆる序的用法が短歌に三首見出される。

庭にふる雪は千重しく然のみに思ひて君を我が待たなくに

(三五〇) 大伴家持

他二例(三三三、四七五)

3 枕詞的用法「み雪ふる」

集中「み雪」なる語は前掲の表のごとく、「三雪」十一例、「美雪」一例、「美由伎」二例、計十四例が見出されるが、そのうち短歌三首(二六五、三三三、三三九)がいわゆる「み雪」で、他はすべて「み雪ふる」と熟語になる性質のものである。

ところで「み雪」と「み雪ふる」の差異について少しく私按を述べると、ともに「み」は接頭語であるが、下に「ふる」がつくとつかぬとよつて語のはたらきが幾分異なる。

場合があるのである。例をもつて示すと「み雪」は夜を寒み朝戸を開き出で見れば庭もはだらにみ雪落りたり(三三八)

のごとく、それは飽くまでも現実の雪を指し、「み雪ふる」の場合には

大君の 遠の朝廷と 任き給ふ 官のまにま み雪ふる
越に下り来……(四三三) 大伴家持

のごとく、そこに詠まれている雪は現に今見ている雪ではなく、多分に観念的に詠み込まれ(この歌は五月二十六日の作である)、しかも他の句を修飾するために用いられているのであつて、云うならば枕詞的に使用されている場合が多いのである。しかも雪そのものを主体に詠んだ長歌は後出の(四三三)ちたゞ一例あるのみで、これ以外はすべて他の句に対する修飾として雪が用いられているのであるが、そのような長歌に「み雪ふる」の用例が多いと云うことも、「み雪」と「み雪ふる」の語のはたらきの差異、すなわち「み雪」は現実的であり、「み雪ふる」は観念的であり非現実的である場合が多いということの証左ともなる。

さて「み雪ふる」は長歌に六例(四一、一九九、三三四、四〇二、四二二、五三三)短歌に五例(三三九、二四九、三三三、三五四、四〇六)計十一例があげられるが、その一々が現実的か非現実的か、云い換えると枕詞的用例であるか否かについての詳論は後日の機会に譲りたい。

4 長歌における対句

長歌に詠まれた雪は(四三七)の一首を除いては、いずれも他の句への修飾の役割をなすものであるが、元来長歌には対句の使用がはなはだ多く、その対句中に雪が詠み込まれた場合が相当に多い。

み吉野の 耳我の山に

時じくぞ 雪は落るとふ

間なくぞ 雨は落るとふ

その雪の 時じきがごと

その雨の 間なきがごと

くまもおちず 思ひつゝぞ来る その山道を(三六) 天武

天皇

他一二例(三三、一九九、三三七、三九九、三六〇、三六一、三六三、三三〇、

三三四、四〇二、四二二)

右に掲げた一例はいわゆる四句連対であるが、小国重年の「長歌言葉珠衣」によれば、二句対句、四句連対、長対、並対など種々の型に分けられることになるが、こゝではそれらの各形式について詳しく記す余裕がないので省略するが、この項に該当しない長歌、すなわち対句中に雪が詠み込まれていない歌が九首(四一、三六一、三六二、四〇〇、四〇三、四〇六、四二二、四二六、四三七)存することを附記しておく。

三

歌の形式からの考察は以上をもつて一先ず終り、続いて歌

の内容から考察して見よう。

1 雪梅

雪と梅花はその色彩は頗る類似しており、その降り散るさま亦必ずしも無縁のものではない。古来この兩者を比えて觀賞したことは幾多の歌集にも記録されているところであるが、万葉集にも「雪梅」なる語が(四二)、(四九)二首の題詞に記されており、また(四三)の題詞には「宴席詠雪月梅花哥」と記されていることからして、万葉人が雪と梅花を並べ賞したてであることは充分に察しられるところである。そうして、

雪と梅を詠み込んだもの三二例

八三、八三、八五、八四、八九、八六、二四六、二四四、二四六、一四四、二六〇、
 六四、六四、二四三、二四五、二四七、二四八、二五三、二五三、二六四、
 一四〇、一四二、一四三、一六三、二二九、二四四、二四四、二五、二五九、四三三、
 四六三、四六三、四六七

確実に梅花と想定されるもの一例

一四〇

梅花の代りに李花を詠んだもの一例

二二〇

計三四例を数えることが出来る。

ところでこの三四例のうち数首の歌はその表現の面から見て更に次のように分類される。

a 降雪の状を落花になぞらえたもの

わがやどの冬木の上に零る雪を梅の花かとうち見つるかも

(二五五) 巨勢宿奈麻呂

他二例(二七七、二八二)

b 落花の状を降雪になぞらえたもの

春の野に霧立ちわたりふる雪と人の見るまで梅の花散る

(八五) 田島真人

他五例(八三、八四、一四〇、二五九、二二〇)

右の二項の歌はいずれも降雪と落花の状を比えて詠んだもので、雪梅の歌としては極めて自然な着想ではあるが、同時にまた甚だ月並的でもある。ともあれこの外に色彩を取り上げたもの、理に走つたものなど種々あるが、それらについて今一々検討する必要もなからう。

2 雪と白髪、白布

a 雪の白きを白髪に通わした寓意一例

ふる雪の白髪までに大君に仕え奉れば貴くもあるか(三五三)
 橘諸兄

尤もこのような例は雪だけではなく「ありつゝも君をば待たむうちなびくわが黒髪に霜の置くまでに」(八七)のごとく霜の場合もある。

b 雪と白布(一例)

筑波嶺に雪かもふるる否をかも愛しき子ろが布ほさるかも
 (三五二) 常陸国歌

右の二例のほかはこの項に該当する歌は「雪梅」の項に若

求められたり、また時に官人達はその仕える天皇、皇族に歌を献るのがこの時代の宮廷生活のならわしであるが、そのような折には諸官人達は競つて降雪の瑞兆たることを強調し、併せて天皇、皇族の御恵の有難さを讃えた(三五、元三、四三、四三〇)ものである。かく雪は瑞兆と見なされてこそ、五百重にも降りしきることを願う心(二六五)ともなつて現われるのである。

雪を瑞兆と見なした歌は以上の九例である。

3 賞美

都人、就中宮廷に仕える官人達は無聊なるまゝにしばしば雪を珍しみ賞したものであるが、或は思いがけぬ降雪を喜び(一〇九、一〇四、四三七、四三六、四六五)或は雪の消え易きを惜しみ(元九、二四六、二五五、三三七)、また著しく降るを望み(二五五)、降りしきる雪に見とれ(二五五)、更には一人で雪を觀賞するよりは背の君と二人で見たらば(二六五)などと各人各様の思いを籠めているが、

大殿の このもとほりの 雪なふみそね しばしばも 零らざる雪ぞ 山のみに 零りし雪ぞ ゆめ寄るな 人やふみそね 雪は(四三七) 三方沙彌

反歌

ありつゝもめしたまはむぞ大殿のこのもとほりの雪なふみそね(四三六)

の二例はいかに雪を珍しみ賞したかを云いつくして余すところがない。

ろがない。

五

以上歌の形式的に、内容的に、また雪に対して万葉人はどのような考えを抱いていたか等、種々の面から雪の歌を考察して来たのであるが、それらの項のいづれにも該当しない歌は

五九、三〇三、一六六、一六三、一七六、三三四、三三五、三三六、三三八、三三九、三三〇、三三一、三三二、三三三、三三四、三三五、三三六、三五八、元〇五、元〇四、四〇六、四〇四、四〇三、四〇二、四〇一、四〇〇、三九九、四八八、三八八、四四九、四四七

の短歌三二首が残るのみである。

六

転じて集中の記録からその時代の降積雪の時期について考察して見ることにする。

先ず月日の明記されているものを、月日順に列記すると次のごとくである。

正月 一日 四五六	天平宝字三年
二日 四三九	天平勝宝三年
三日 四三〇、四三二、四三三、四三四、四三五、四三六	"
四日 四三二、四三三	" 五年
五日 一〇八一	天平一六年
一一日 四三五、四三六、四三七	天平勝宝五年
一二日 四三六	"

一三日	八三、八三、八三、八四	天平二年
?	三九三、三九三、三九四、三九五、三九六	一八年
二月 なし		
三月 一日	四四〇	天平勝宝二年
一六日	四七九	天平二年
一二日	四〇三	二〇年
四月 二七日	四〇〇、四〇一	一九年
二八日	四〇九、四〇九	
五月 一五日	四二〇	天平感宝元年
一三日	四二一	
二六日	四二三	
一七日	四二六	
六月 一五日?	三三〇	年代不明
七月 ?	一九	持統天皇一〇年
八月 ?	一七六	神龜五年
九月 二六日	四二一	天平一九年
十月 なし		
十一月 五日	四七二	天平勝宝八年
九日	一〇一〇	天平八年
一三日	四七五	天平勝宝八年
二七日	四六一	四年
二八日	四四五	七年
?	三九〇	天平一八年

十二月九日 五〇

一八日 四六

? 四三

? 四三

註 六月十五日(三〇)番の歌は「詠不盡山歌」の反歌「不盡

の嶺に零り置く雪は六月の十五日に消ぬればその夜ふりけり」であるが、これは何も六月十五日に詠まれたわけでもなく、たゞ理屈をこねて歌つたもので、殆んど参考にならぬ歌であるが

一応こゝに掲げておいた。

? のついでているのは詠まれた日の不明な歌である。

右の表によつて降雪のなかつた時期を判断すると、少くとも三月一七日から十一月四日までの間は実際の降雪なしと考えられる。この期間は春から秋までの期間であるから降雪のないのが当然であるが、ただ長歌及びその反歌にはしばしば雪が詠まれているが、それは眼前の降雪を詠んだものではなく、前述のごとく靈山の神祕性を深めるために雪を詠んだり、或は他の句の修飾のため(一九、一七六、四二一、四三三、四三二)に用いられたりしたものである。また高山の降雪(三三〇、四〇〇、四〇一、四〇三、四〇四)及びその雪消(四四四、四四六、四二二)は平地におけるそれとは全然別のものであり、かく考えて来ると右の表における三月二十二日から九月二十六日までの十三首は、降雪の時期を考察する点には何ら関係しないことになるのである。

かくて万葉集の記録によれば最も早く降雪を見たのは天平勝宝八年

冬十一月五日夜少雷起鳴、雪落覆庭。忽懷感憐聊作短歌一首

消残りの雪にあへ照るあしひきの山橋をつとに摘み来な
(四四七) 大伴家持

ということになり、最も遅くまで降雪があつたのは天平二十一年(この年四月十四日に天平感宝と改元)三月十六日ということになるのであるが、それは次の歌である。

三島野に霞たなびきしかすがに昨日も今日も雪はふりつゝ
(四四九) 大伴家持

ところでこの歌の左註には「三月十六日」とあり、歌に「昨日も今日も」とあるように、このところ十五日、十六日と連続に降雪があつたことが察しられるが、従つてその翌日の十七日以後にも或は雪が降つたかも知れないが、それらのことについては全然記録されていないから何とも判断しかねることである。よつて最も遅くまで降雪を見たのは三月十六日と考える次第である。

以上は集中の記録にもとずいて最初と最後の降雪の時期を考察して見たまでであるが、これをもつて万葉時代の降雪の時期を明らかにし得たとは考えていない。これは飽くまでも一つの参考であつて、所詮降雪の時期は年により地方によつて幾分の差もあることであるから種々に推測するより外はな

いのである。

七

降雪の時期について降雪の量とその情景について考察して見ると、これも年により地方によつて幾分の違いはあるが、ともかく記録されている降積雪の量の多い順に列記すると次のごとくである。

1 天平勝宝三年正月二日、守館集寒。於時零雪殊多、積有_二四尺焉_一……(四三九)の左註

2 天平勝宝五年正月十一日、大雪落、積尺有二寸。……(四六〇)の題詞

3 天平十八年十一月、是日也白雪忽降、積地尺余……(四六〇)の左註

4 天平十八年正月、白雪多零、積地数寸也……(四三三)の題詞

5 天平勝宝三年正月三日、于時積雪彫成重巖之起奇巧綵_二癸草樹之花_一……(四三三)の題詞

降雪の量の考察には以上の五例より他に直接の参考となる資料が見当らない。このうち1、3、5は「み雪ふる越」と歌われている越中国のことであるから、四尺ばかりの積雪もそれ程珍しいことではなく、結局京師における2と4が注目されることになるのであるが、京師では「積地数寸」の雪を多零と考え、左大臣橘諸兄以下多くの王臣達が急いで太上(元正)天皇の御在所(中宮西院)へ参入して掃雪奉仕をす

るなど少々滑稽じみているようだが、これは当時の宮廷生活の一端を窺う上にも興味ある問題である。

ともかく集中の記録によれば、降積雪の最多量は越中における四尺、次いで京師の一尺二寸となるのである。

さてつゞいて降雪の情景について述べることにする。雪の将に降らむとする時は先ず陰鬱な雪雲が空一面を覆うものであるが、此の時の情景を万葉歌人達は

天霧らし 一六四、三三四、三三四、三三四

うちきらし 一四四

たなざらひ 一六四

天雲きらひ 一八三

たな曇り 三二〇

と表現したのであるが、これを賞美する気持からは「天の下すでに覆ひて」(三三三)とも考えたのである。しかし何といつても風まじりに降る雪(一四四、一八五)、雨まじりの雪(八九)は少しも好ましいものではなく、ましてあらしの中に降る雪の夜(三三六、三三六)のつらさは耐え難いことであつたらう。

そうしてまた雪の降りしきる(三三三)時は遠望のきかぬものであるが、それを

山の峽そことも見えず一昨日も昨日も今日も雪の降れば
(三五四) 紀 男棍

と歌い、雪の空から降り来るを「天伝ひ来る」(二六二)といひ、流れ来る(八三三)とも表現したのである。

ついでに「ふる」がどのような文字で記されているかを簡単に記しておこう。われわれが普通に使っている「降」は(三五〇)の題詞にたゞ一例(但し「あられ」にも一例(二五三))があるのみで、「零」「落」が多く使われており、他にカナ書が幾何か存するのである。尤も「ふる」「ちる」についてはすでに種々に論じられているから、こゝでは簡単にその用例を表示するにとどめる。

	歌	題詞	左註	計
零	六六	一	一	六八
落	三〇	三	一	三四
降	一	一	一	一
カナ書	三三二	一	一	三三二

右の数字は歌の数ではなく各文字の使用回数を示すものである。従つて一首の中に二回用いられている場合もあるので当然歌の実数よりは多い数が表われている。「落」の歌に二首「チル」と訓む例が存し、他に「塵けむ」一例が存する。カナ書には布良、布利、布里、布理、敷里、布流、不流、敷流、布禮、敷禮の十種の用例が見られるが一々區別する必要もなからうから一まとめにしておいた。

その他雪の降るを、「流る、流らふる、ながれ来る、く(来)らし、天伝ひ来る、乱れて来れ」等六種六例の表記がある。

八

最後に霰について記して見よう。あられを詠んだ歌は集中に十首存するが、その用字は

霰 壹、一九一云、六五、二四、三三、三三

丸雪 三五

雹 三三

安良礼 四九

阿良例 四〇

のごとく霰が最も多くて六首、丸雪、雹のような変つた用例が各一首、カナ書が二首ということになり、題詞、左註には全然見出されない。

ところでこれらの霰の歌はその七首までが「霰打つ(三五)、註霰なす(一充)一、霰ふり(六五、二五、三五、三三、四〇)」「であつていわゆる枕詞として用いられているのである。そうしてこれらの枕詞は

霰打つ安良禮松原住吉の弟日娘と見れど飽かぬかも(三五)

長皇子

の「安良禮松原」をはじめそれぞれ「そちより、吉志美が嶽、鹿島の崎、遠つ近江、遠つ大浦、鹿島の神」等につゞくのである。

残る三首はいわゆる枕詞としてではなく、普通に詠まれているのであるが、それは

霜の上にあられたばしりいやましに我は参来む年の緒長く

(四三五) 大伴千室

をはじめ外二例(三三、三三)存するが、今その一一について考察する必要もなからう。

たゞ「ふり」の用字に、零三、降一、布理一があることを附記しておこう。

註 「あられなす」を枕詞として扱つた註釈書はないようであるが、「なす」は「の如く」の意で、鶺鴒なす(一充)、蟹なす(三四)、五月蠅なす(四八、八七)、泣く子なす(四六、七五、三三、三五、三五)等の場合と同じく枕詞と見なすべきものである。そうして「あられなす」の用例は集中僅かにこの一例が存するだけなので、この句を枕詞と見なすか否かについては種々の意見もあろうが、どちらにしてもともかく「あられなす」そちより来れば「は甚だ上下のつゞきが悪く落ちつかぬ句である。

以上簡単ながら八項目にわたつて万葉集の雪の歌について、記述における文字、歌の形式、内容、或は万葉人の雪に對する見方及び降雪の時期、量、情景等を検討して見たのであるが、簡略を旨としたため細部の論述の不足は遺憾ながらいたし方のないことである。これらの補いと他の自然現象についての検討は今後に残された問題である。